「Hatton Awards 最終選考を終えて」

関　遥

鹿児島大学歯学部４年

2018年７月24日，ロンドンにて開催された第96回IADR Hatton Awards の最終選考発表に参加させて頂きました（写真１：IADR London 開会式）。

訪れるには最も良い時期であると聞いていたため，７月のロンドンはさぞかし涼しく過ごしやすいのだろう，と期待に胸踊らせておりましたが，颯爽と空港から一歩足を踏み出すと，照りつける太陽と熱気に襲われました。こんなはずではない，とすぐさま踵を返し，涼しいであろう地下鉄に駆け込みました。

話によりますと，イギリスのみならず，ヨーロッパは数十年ぶりのヒートウェーブであったそうで，高温多湿の著しい鹿児島からやっと抜け出せると膨らませていた期待は，30度を超えた気温と，帰宅ラッシュによりすし詰め状態となったクーラーの一切効いていない地下鉄の車内により無残にも打ち砕かれました。サウナの如き地下鉄に揺られ，暑さと人の多さに，意識朦朧としておりますと，アメリカ人旅行代理店員の放った「あなた住んでるのとても南の田舎，東京から遠い，だからチケット代高い，東京からロンドン安い」という言葉と共に，地元鹿児島の不快指数が脳裏に蘇ります。と同時に，飛行機に搭乗する前から心に張り付いていた緊張も些か解けていく様な心持ちが致しました。

常々，「私はこう見えて神経が細いのです。」と周囲の先生方に声高に申し上げているのですが，どの際も，間をおかず一笑に付されます。指導教官である後藤教授におかれましては，いくら生きた心地がしないのですと訴えようとも，なにを図々しいことを，と鼻でお笑いになる次第でございます。会場である ExCeL London に着き，最終選考発表を待つ間も，同様でありました。IADR への参加は初めてであるということ，国際学会という高尚な場所でのアカデミックな発表も初めてであるということから，今迄に体験したことのない緊張を全身に感じておりましたが，周囲の先生方は，神経の過敏を訴える私に対し，懐疑的な目を向けるのみでございます。

落ち着かず会場を歩き回っておりますと，終に名前を呼ばれます。急ぎ足で発表会場である部屋に入りますと，小ぢんまりした空間に，巨大なスクリーン，スクリーンに向かい左手にステージと演台，右手の長机に審査員の先生がお二人いらっしゃいました。眼前に迫る明らかに大きすぎるスクリーンに狼狽えておりますと，その動揺を感じ取ってくださったのか，審査員の先生方は，「緊張しないで良いので，楽しみましょう。」と声をかけてくださいました。ところが前申す通り，常ならず緊張していた為でありましょうか，存在感が過大であるはずの巨大な演台を横目に，マイクも手に取らず発表を始めてしまうという失態を演じてしまいました。失態にも気づかないほどの焦りに加え，マイクなしの聞き苦しい地声での発表であったにも関わらず，お二人の先生方は発表内容に大変興味を持ってくださり，質疑応答も終了予定時刻を超えて行われました。

練習の成果もあり，発表自体の出来には充足感を感じておりましたが，反して，質疑応答は反省点の多いものとなりました。専門的な単語が理解できない，相手の知りたい内容を正確に把握できない，わからない質問に対しての冷静な対応ができない等々，緊張した時やパニックになった時でもなんとか応対できるだろうと，過信しておりました自分の至らないところを存分に思い知る大変に貴重な経験となりました。予想のつかない質疑応答は常に恐怖の対象であります。質疑応答を完璧に終えることができてこその発表であること，大切であるのは発表以上に質疑応答でのオーディエンスとのコミュニケーションであることを痛感致しました。その後も，27日のポスター発表で質問をくださった先生方や，発表後に言葉を交わした Junior 部門での他国の代表の先生方から，自身の反省や研究に対する姿勢など，多くのことを学ばせて頂きました。

実を申しますと，ロンドンは今回で二度目の訪問でございます。体調は崩す，シーク教徒以外の人は冷たい，物価は高い，飯は不味いという前回の体験から，

あまり良い印象のないロンドンではありましたが，今回の体験を受けまして，その悪印象も払拭されたようでございます。美味しいものがない，物価が高いという点は主観的には紛う事なき事実ではありますが，ウィスキーを心の糧としている自身の性質上，学会後に訪れたスコットランドで浴びるほど飲んだウィスキーがその全てを相殺致しました。

学生のうちから，このように価値のある体験を得ることのできる素晴らしい機会を与えてくださった　鹿児島大学歯学部歯科機能形態学　後藤哲哉教授，Hatton Awards 国内選考での審査員の諸先生方，研究発表のためご指導くださいました先生方，並びに大事な最終号である本紀要に寄稿のお話を下さいました南教授に心より感謝申し上げます。